

中国語の単位と四字格度数認定の意義

藤野 安紀子

1 四字格度数の設定

中国語において四字格とは漢字四字から成る言語形式である。筆者は四字格の中にも四つの字が集まっただけという状態のものから完全な四字格までレベルがあると仮定し、そのレベルを「四字格度数」として認定していくという方法を考えた。以下、四字格に度数を設定することの意義及び認定の方法について述べる。

2 単位による考察の違いと問題点

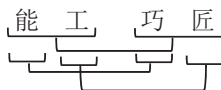
陆志韦 (1956) 〈汉语的并立四字格〉、徐通锵 (2008) 《汉语字本位语法导论》、周荐 (2004) 〈四字组合论〉、冯胜利 (1997) 《汉语的韵律、词法与句法》の四編は、それぞれ異なる単位から四字格を考察している。本章では、これらの先行研究が四字格をどのように考察しているか及びその問題点について考えていく。

2-1 「語」(「词」) から考察する陆志韦 (1956) 〈汉语的并立四字格〉

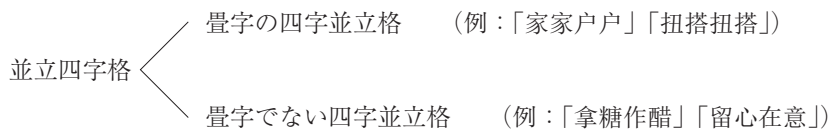
陸志韋〈汉语的并立四字格〉は四字格を「語」(「词」) から考察する。陸は「走在路上」「木质坚硬」「能工巧匠」という三つの例を挙げ、この三つは全て四字格であると言っている。そしてその中で「能工巧匠」のような例は「能工」と「巧匠」、「能」と「巧」、「工」と「匠」が対になっているということで、このような四字格を「並立四字格」と呼び研究対象としている。

「走在路上」「木质坚硬」「能工巧匠」は全て四字格である。この三例はまたそれぞれ異なっており、内部の文法構造はまるで違っている。さらに三番目の例の構造が前二例よりもかなり緊密であることがわかるであろう。(陆 (1956))

並立四字格



さらに陸は並立四字格を「疊字の四字並立格」と「疊字でない四字並立格」に分けているが、この二つのうちの「疊字の四字並立格」の分析で注目したい点がある。陸の四字格の考察は、構造言語学における造語法の見解に基づいた語の認定の問題であると言えるが、疊字の四字格の分析でも「語になる」「語にならない」という表現が見られる。



陸（1956）は現代語中の疊字格を以下のように比較している。「語としての性質」や「造語の資格」「語になる」「語にならない」という表現に注目されたい。

甲甲乙乙：構成が最も緊密で、語としての性質（「词性」）が最も強い型。

甲乙甲乙：少数の例外を除いて残りは全て文中でその部分だけを言うことができ、単独で使える。特に「唱啊，唱啊」「还有，还有」のようなものは元々造語の資格（「构词的资格」）を備えていない。

甲乙甲丁：大多数は二つの甲が「有×有×」「没×没×」「不×不×」「又×又×」のようなセットを構成する。並立二音節語の二つの成分を入れれば、一つの語を構成できる（「可以构成一个词」）。二音節語を成さない二つの字を入れると、語としての性質は強くないか、或いは全く語にはならない（「算不上词」）。更にこの型を広げて多音節語或いはフレーズを入れれば、四字格でなくなる。「有椅子，有沙发」「不这么稀松，不这么随随便便的」。

甲乙丙乙：甲乙丙乙にもセットを構成するものがある。甲乙甲丁のように容易に字が入られるのではないが、実際には字を入れてはいけないのではなく、入れた後言語習慣に合わないだけである。この習慣があれば語になる（「可以成词」）。「心服口服」は語で、「心服嘴服」がもし口語にあれば、語ということになる。同様に「心焦口焦」がもしある言語環境に突然現れれば、新語である。

2-2 「字」から考察する徐通鏘（2008）《汉语字本位语法导论》

次に挙げる徐通鏘《汉语字本位语法导论》は、四字格を「字」から考察する。徐は中国語の研究に合った理論と方法を「字本位理論」として提唱し、それに基づいて四字格を扱っている。「字本位理論」とは、形・音・義が結合した「字」を中国語の基本構成単位とするという考え方である。「字本位理論」に基づいて四字格を考察すると、例えば、「啪」という「1」から「2」「噼啪」

が生成され、さらに「2」から「4」「噼噼噼噼」「噼噼噼噼」「噼里啪啦」が生成されるということになる。「4」は「1」から転じて出てきた最も長い「固定字組」の形式であるとされる。この「1」が「2」に分かれ、「2」が「4」に分かれる、という過程が徐通鏞の「字本位」の立場である。

字組の形成過程「1」→「2」→「4」

(例:「啪」→「噼啪」→「噼噼噼噼」「噼噼噼噼」「噼里啪啦」)

また徐(2008)中の、《诗经》《尔雅》に現れる四字格の構造の型についての見解をまとめると、以下のようになる。

《诗经》《尔雅》に現れる構造の型は四類に分けられる。

この四種類の型は全て連綿字の構造であるAAとABが変わった形である。

AABB: AA式の重なり

ABAB: AB式の重なり

ABAD: 一字目と三字目がAA式の重言、二字目と四字目がAB式の双声あるいは疊韻

ABCB: 一字目と三字目がAB式の双声あるいは疊韻、二字目と四字目がAA式の重言

これらはほとんどが事物の性状を描写する必要から造られた「擬音」と「擬態」の言語形式で、多くが詩賦の創作に運用され、連綿字の運用範囲にはほぼ相当する。(徐(2008))

2-3 「語素」から考察する周荐(2004)〈四字組合論〉

次は「語素」、形態素から考察する周薦〈四字組合論〉を取り上げる。周は四字格を、いくつの語素から構成されるかによって分けている。周(2004)によれば四字格には一つの語素から構成されているものから、四つの語素から構成されているものまでであるが、この中で、四つ以上の語素が構成する単位には、その単位が語なのか「固定短語」なのかという難題(「归词归语的难题」)があるとされている。それに対する周の結論は、その単位を切り分けた後の二つの構成要素(或いは少なくともその中の一つの構成要素)が独立して自由に使われれば語と見なされ、使われなければ「固定短語」と見なされるというものである。

周(2004)における語素の数と四字格の単位の関係

一つの語素から成る: 例外なく語(「词」)と見なされる。

二つの語素から成る: 語(「词」)と見なされるものもあれば、語(「词」)と見なすべきでな

く、「固定短語」と見なすのが適当なものもある。

三つの語素から成る：二つの語素から成るものと同じで、語（「詞」）と見なされるものもあれば、「固定短語」と見なすべきものもある。

四つの語素から成る：大多数が「固定短語」と見なすべきものである。少数、語（「詞」）と見なしてよいようなものもある。

2-4 「韻律詞」から考察する馮勝利（1997）《汉语的韵律、词法与句法》

最後は「韻律詞」から考察する馮勝利《汉语的韵律、词法与句法》である。馮は四字格はどのように構成されているか、基本の性質は何かという問題提起をして、四字格の「格」を成立させるのは中国語の韻律詞であると言っている。韻律詞は韻律学の角度から「最小の自由に使える言語単位」を定義したもので、韻律学の角度から定めた「語」の概念である。

「韻律詞」は韻律学の角度から定めた「語」の概念である。一般に最も流行している「語」の定義はシンタックスの角度から語を「最小の自由に使える言語単位」と定めたものである。「韻律詞」は韻律学の角度から「最小の自由に使える言語単位」を定義したものである。韻律学の中の「言語単位」は「韻律単位」である。そのため韻律詞は言語の中の韻律単位を基礎とする。

（馮（1997））

四字格は中国語の中の独立した表現形式である。この一点に議論の余地はないようだ。しかしそれらの構成の方式は何か。基本の性質は何か。これまで統一的な結論がないが、これは決して不思議なことではない。大まかに言えば、成語・ことわざ・重ね型・一般的な短語に至るまで、全て四字だからである。

（馮（1997））

馮は、四字格には次の重音規則があるとしている。

馮（1997）における四字格の重音規則

- （一）四つの音節がある
- （二）[軽中軽重] か [中輕輕重] の重音規則を守っている
- （三）使用において独立性がある

2-5 問題提起

陸（1956）は、「走在路上」「木质坚硬」「能工巧匠」の三つについて、これらは全て四字格であるとし、その中の並立四字格を研究対象としている。そしてまた量字の四字格の分類で「語になる」「語にならない」という検証が出てくる。周（2004）は、四つ以上の語素が構成する単位

には、その単位が語なのか「固定短語」なのかという問題があることに対して、構成要素が独立して使われなければ語、使われれば「固定短語」であるとしている。そして冯（1997）は、四字格には「四つの音節がある」「[軽中軽重] か [中輕輕重] の重音規則を守っている」「使用において独立性がある」の三つの規則があると指摘する。ここから筆者は、四字格にはただ四つの字が集まっただけというものから、完全な四字格までレベルがあるのではないかと仮定し、そのレベルを「四字格度数」として認定していくという方法を考えた。

3 四字格度数の認定

分析したのは、朱自清《荷塘月色》⁽¹⁾の、《采莲赋》と《西洲曲》の引用部分を除く全文である。まず文章を四字に切っていく。例えば「這幾天心裏頗不寧靜。」を「這幾天心」「幾天心裏」というように切っていく。

「這幾天心裏頗不寧靜。今晚在院子裏坐着乘涼，」

→ 「這幾天心」「幾天心裏」「天心裏頗」「心裏頗不」「裏頗不寧」「頗不寧靜。」

「不寧靜。今」「寧靜。今晚」「靜。今晚在」「今晚在院」「晚在院子」「在院子裏」

「院子裏坐」「子裏坐着」「裏坐着乘」「坐着乘涼，」

その後、四字を一字ずつ分類していく⁽²⁾。分類項目⁽³⁾は、単語分かれ・介詞・指示詞・副詞・接続詞・助詞・方位詞・語気詞・本数詞・助数詞の10種類で、本文は1098字、分析した四字は1089項である。

3-1 四字格度数「0」度——単語分かれ

まず四字格度数0度に認定する四字である。これは「単語分かれ」というもので、単語が分かるとその四字は四字格になる資格がなくなる。例えば「這幾天心裏頗不寧靜」の「裏頗不寧」は「寧靜」という単語が分かれているため四字格になることができない。

- ・這幾天心裏頗不寧靜：「寧靜」が分かれているため、「裏頗不寧」の四字は四字格になることができない。
- ・今晚在院子裏坐着乘涼：「院子」という単語が分かれている。
- ・在這滿月的光裏：「滿月」が分かれている。
- ・忽然想起日日走過的荷塘：「忽然」と「日日」が分かれている。

また、単語分かれの前では単語分かれ以外の項目はその機能を保てなくなる。例えば上述の例

「忽然想起日日走過的荷塘」中の「然想起日」の「然」は「忽然」が分かれたものであるが、単語が分かれたことによって「忽然」の副詞としての機能もなくなる。

- ・ 忽然想起日日走過的荷塘 → 「忽然」という単語が分かれたことによって、「忽然」の副詞としての機能もなくなる。
- ・ 雖然月光也還是淡淡的 → 「雖然」の接続詞としての機能もなくなる。
- ・ 只有些大意吧了 → 「吧了」の助詞としての機能もなくなる。

単語分かれにより四字格になることができない四字は509項であった。このように、単語が分かれた四字は四字格度数の0度に設定する。

3-2 四字格度数「1」度

3-2-1 四字の最後の一つになることができない——介詞・指示詞・副詞・接続詞

介詞・指示詞・副詞・接続詞は四字の最後の一つになることができない。それはこれらに後ろの部分を導く機能があるためである。例えば「葉子和花彷彿在牛乳中洗過一樣」中の「花彷彿在」は四字の最後の一つが介詞のため、四字格度数は完全な四字格より低くなる。

介詞	・ 葉子和花彷彿在牛乳中洗過一樣	・ 這些樹將一片荷塘重重圍住
指示詞	・ 我且受用這無邊的荷香月色好了	・ 但我以為這恰是到了好處
副詞	・ 今晚卻很好	・ 而葉子卻更見風致了
接続詞	・ 靜靜地瀉在這一片葉子和花上	・ 塘中的月色並不均勻；但光與影有着和諧的旋律

ここではこれらの四字を、四字格度数の中の、「単語分かれ」より高く「完全な四字格」より低い範囲に置いて暫定的に1度に設定する。

四字格度数1で、今回「四字の最後の一つになることができない」とした介詞の中で、韻律の観点から見ると「四字の最初の一つになることができない」と見なすことのできるものがある。例えば「瀉在 | 這一片葉子和花上」と、「在」「這」の間にポーズを置いて言うことはできるが、「瀉 | 在這一片葉子和花上」と、「瀉」と「在」の間にポーズを置いて言うことはできない。これは「在」と前の動詞の結合が緊密であることを意味している。

- [可] 「瀉在 | 這一片葉子和花上」
- [不可] 「瀉 | 在這一片葉子和花上」

- [可] 「畫在 | 荷葉上」
 [不可] 「畫 | 在荷葉上」

3-2-2 四字の最初の一つになることができない——助詞・方位詞・語気詞

助詞・方位詞・語気詞は四字の最初の一つになることができない。これらはある語に付いて初めて作用を発揮するためである。例えば「月亮漸漸地升高了」中の「地升高了」は、四字の最初の一つが助詞のため、四字格度数は完全な四字格より低くなる。これらの四字も1度に設定する。

- | | | |
|-----|-------------------|------------|
| 助詞 | ・月亮漸漸地升高了 | ・長着許多樹 |
| 方位詞 | ・這路上陰森森的 | ・白天裏一定要做的事 |
| 語気詞 | ・已經聽不見了；妻在屋裏拍着閨兒， | |

3-2-3 本数詞と助数詞

本数詞と助数詞の間の関係では二種の異なる関係を見出すことができる。一つは「路的一旁」の「一旁」のように結合が強いもので、もう一つは「路上只我一個人」の「一個」のように結合が弱いものである。結合が弱いとは、例えば「路上只我一個人」の「一個」の「一」は「兩・三・四……」などと取り替えることができるということである。このように考えると、結合が強い本数詞と助数詞が分かれて四字に現れれば「単語分かれ」となり、結合が弱い本数詞と助数詞であれば、たとえ分かれて四字に現れたとしても四字格度数は「単語分かれ」より高くなる。

結合が強い（例：「路的一旁」）

的。路的一	}	単語分かれ
旁，是些楊		

結合が弱い（例：「路上只我一個人」）

上只我一	}	度数は「単語分かれ」より高い
個人，背着		

しかしここでは、本数詞が四字の最後の一つになっている場合は度数1に設定し、助数詞が四字の最初の一つになっている場合は度数1としなかった。つまり助数詞が四字の最初の一つになっているときは、度を低くすることはしないということである。それは、例えば「便覺是個

自由的人」の「個」や「零星地點綴着些白花」の「些」ように、助数詞が本数詞とセットではなく単独で使われることは珍しくないためである。

本数詞が四字の最後の一つ——度数1

- ・ 蓊蓊鬱鬱的。路的一旁，是些楊柳，
- ・ 路上只我一個人，背着手踱着。

助数詞が四字の最初の一つ——度数関係なし

- ・ 蓊蓊鬱鬱的。路的一旁，是些楊柳，
- ・ 路上只我一個人，背一手踱着。

しかし今回分析対象とした文章の中に「到了另一世界裏」という、「一」の後ろに助数詞のない例がある。このような例を見ると、本数詞が四字の最後の一つになっている場合も度数を下げなくてもいいのではないかという可能性が出てくる。

助数詞が単独で使われる例

- ・ 便覺是個自由的人
- ・ 零星地點綴着些白花

本数詞が単独で使われる例

- ・ 到了另一世界裏

3-3 四字格度数「2」度と「3」度

0度と1度以外の四字では、AABBの重ね型と成語を完全な四字格として3度に設定し、その他の四字（例：「我愛熱鬧」「舞女的裙」）は暫定的に2度に設定する。

3-3-1 AABBの重ね型——3度

3度にするのはまずAABBの重ね型である。陸（1956）では甲甲乙乙となっているが、陸（1956）では「甲甲乙乙は構成が最も緊密で、語としての性質が最も強い型である」と述べられており、馮（1997）からもAABB形式の重ね型は四字格の重音形式を守っていることがわかる。また呂叔湘の《中国文法要略》の記述からもこの重ね型の四字格の独立性を見出すことができる。

また元々複合語であるものの上と下をともに重ねる量字の複合語もある。これは口語でも使われる。このような語は重ねてもよいし重ねなくてもよいが、半分に切って使うことはで

きない(元々重ねてもよい字であるものを除く)。「糊塗」或いは「糊糊塗塗」は言えるが、「糊糊」或いは「塗塗」とは言えない。(呂(1942))

《荷塘月色》に現れるAABBの重ね型の四字は以下の6項である。これらの四字は、他の四字より高い度数の範囲、3度に置く。

「迷迷糊糊」「蓊蓊鬱鬱」「曲曲折折」「遠遠近近」「高高低低」「隱隱約約」

3-3-2 成語——3度

AABBの重ね型の他、四字成語も度数3に設定する。冯(1997)は一般的な成語の重音形式が全て[輕中輕重]式で、四字格の重音形式を守っていると指摘しているためである。《荷塘月色》に現れた成語「沒精打彩」は度数3に設定する。

4 結果

今回設定した度数は全部で4度(0・1・2・3度)である。この4つの度数の中では度数の低いものが高いものより優先される。例えば「這幾天心裏頗不寧靜」の「裏頗不寧」の構成要素は「裏」の「方位詞」、「頗」の「副詞」、「不」の「副詞」、「寧」の「単語分かれ」だが、たとえ他の構成要素があったとしても最も優先されるのは0度の単語分かれということになる。

「這幾天心裏頗不寧靜」

- 裏 → 方位詞
- 頗 → 副詞
- 不 → 副詞
- 寧 → 単語分かれ ◎最優先

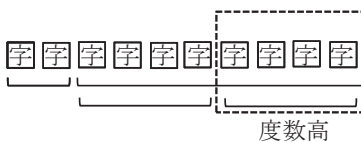
筆者は四字格にはただ四つの字が集まっただけというものから完全な四字格までにレベルがあると仮定し、《荷塘月色》を分析対象として四字格度数を設定した。この中で「単語が分かれている四字」を0度に、「介詞・指示詞・副詞・接続詞・本数詞が四字の最後の一つになる四字」と「助詞・方位詞・語気詞が四字の最初の一つになる四字」を1度に、AABBの重ね型と成語の四字を3度に、それ以外の四字を2度に設定した。以下は各度数における四字の数とパーセンテージである。

分析項目	四字格度数(度)	《荷塘月色》中の数	《荷塘月色》中のパーセンテージ
単語分かれ	0	509/1089項	46.7%
介詞・指示詞・副詞・接続詞が四字の最後の一つ	1	188/1089項	17.3%
助詞・方位詞・語気詞が四字の最初の一つ	1		
本数詞が四字の最後の一つ	1		
0度と1度以外の四字(AABBの重ね型・成語を除く)	2	385/1089項	35.4%
AABBの重ね型	3	7/1089項	0.6%
成語	3		

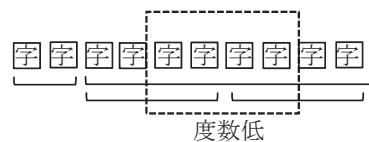
5 結論

今回の度数認定では1089項の四字を大きく区切って4つの度数に分けた。0度の四字が全体の46.7%、2度の四字が35.4%という結果が得られたが、今後さらに造語法とシンタックスの観点から度数を細分化し、1089項が一行に並ぶようにして観察していきたいと思っている。細分化により、現在の「乘涼，忽然」「另有一番」のように不完全感のあるものと、「坐着乘涼」のように独立感のあるものが同じ度数にあるという状態をなくしていきたい。例えば現在2度に設定されている四字は、直接成分分析により、下図①、②の点線で囲まれた四字では、それぞれAの四字の方がBの四字よりも度数が高くなると思われる。

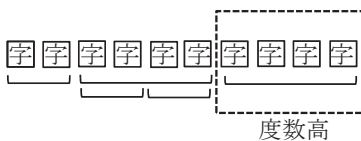
①-A



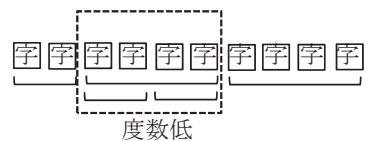
①-B



②-A



②-B



筆者は今回四字格度数を認定していく過程で、中国語の単位というのは字と字の結合が強いかわ弱いかが決めるのではないかと考えるに至った。中国語の研究の中で、特に四字格を扱うものが

「四字格は独立した言語形式である」と言っている一方で、四字格はまだ字、語、フレーズ、ひいては文まで、どのレベルで議論されるべきなのか、それさえ定まっていない。非線性のレベルとして、造語法に基づき複合語との関わりを考えるにしても、複合語と短語の間の平行性構造という現象が存在する以上、線性のレベルのシンタックスを全く排除することは難しい。

もし「大小」が語の組み合わせなら、「大」と「小」の間に接続詞「和」或いは「或」を加えることができるが、複合語の「大小」はこのようにできない。 (高 (1948))

中国語の複合語内部の各構成要素の間関係は統語構成によって実現される(冯 (1997))

この四字格度数の認定では字を一字一字線性で追っていくという方法をとっているが、四字格の造語法やシンタックスの中での扱われ方を議論するためにはこの方法で四字格の形成まで遡る必要があると考えられる。

6 反例の検証と今後の展望

本章では、『荷塘月色』中での反例と、他のテキストを分析対象としたときに現れる可能性のある反例の双方を挙げ、今後の展望に繋げていくこととしたい。

6-1 成語

《荷塘月色》には「别有風味」という四字が出てくる。成語辞典にも掲載されている四字であるが、この四字は「别有一番风味」と、「一番」が挿入されて使われることもあるため、ここでは暫定的に2度に設定する。成語は四字格の完全な形であるという仮定の下で四字格度数を設定したが、この「别有风味」のように、成語辞典に載っている四字格にも「别有一番风味」と間に挿入できるものがあり、成語だからと全て3度になるとは限らないという可能性を示唆するものとなった。しかし成語の構造を分析して四字格度数のレベルに組み込むと、例えば「说三道四」は「本数詞が四字の最後の一つ」であるため、度数1となる。成語の認定を先行して行うべきか、レベルに組み込んでいくかを考えなければならない。

6-2 「単語分かれ」

「月亮渐渐地升高了」の「升高」は単語分かれで0度と認定したが、動補構造であるため単語分かれとは言えないという可能性がある。この他動賓構造の「采莲」や聯合構造の「楊柳」も単語分かれとした。これらは2度になる可能性のある四字である。

6-3 「度数1」

『荷塘月色』にはなく、他のテキストを分析対象としたときに現れる可能性のある反例であるが、「说这说那」「高兴得很」「你爱不爱？」のような四字は、「指示詞・副詞は四字の最後の一つになることができない」という規定を受けて1度になる。また例えば「上有天堂」や「上边有书」などは「上」が方位詞であるため、「方位詞は四字の最初の一つになることができない」という規定を受けて1度になる。これらは、例えば2度に認定されている『荷塘月色』の「乘涼，忽然」の方が度数が高いという矛盾に陥る。

今回「四字格度数」の認定をしたのは『荷塘月色』のテキストの中に出てくる事象に対してのみである。今後更に古文など他のテキストも分析対象とし、度数を標準のスケールに改良していきたい。その過程では『荷塘月色』の中だけで設定した度数が変わっていく可能性もあると考えられる。

注

- (1) 『小说月报』，第18卷第7期，1927年7月10日。
- (2) 卷末の度数表（一部）を参照されたい。
- (3) 分類の参考資料は以下の四編。
 - ・北京大学中文系现代汉语教研室 编1993，《现代汉语》，商务印书馆，2012年增订本。
 - ・李行健 主编《现代汉语规范词典 第3版》2014年11月第1版第1次印刷，外语教学与研究出版社 语文出版社。
 - ・马真1997，《简明实用汉语语法教程》，北京大学出版社。
 - ・吕叔湘 编1992，《中国語文法用例辞典——《現代漢語八百詞增訂本》日本語版》，東方書店、2004年改訂版第2刷。

参考文献

- 冯胜利1997，《汉语的韵律、词法与句法》，北京大学出版社。
- 高名凯1948，《汉语语法论》，商务印书馆，1986年重印。
- 陆志韦1956，《汉语的并立四字格》，《语言研究》第一期，北京科学出版社。
- 吕叔湘1942，《中国文法要略》，《吕叔湘文集》第一卷，商务印书馆，1990。
- 王洪君2008，《语言的层面与“字本位”的不同层面》，语言教学与研究2008年第3期。
- 徐通锵2008，《汉语字本位语法导论》，山东教育出版社。
- 周荐2004，《四字组合论》，《汉语学报》2004年第一期，商务印书馆。
- 刘洁修《汉语成语考释词典》商务印书馆，1989年8月第1版第1次印刷。
- 向光忠 李行健 刘松筠《中华成语大辞典》吉林文史出版社，1986年12月第1版第1次印刷。

中国語の単位と四字格度数認定の意義

[資料] 四字格度数表

No.	四字	符	1	符	2	符	3	符	4	符	1	2	3	4	度数				
1	這幾天心		這		幾		天		心		指示詞	本数詞	助数詞		2				
2	幾天心裏		幾		天		心		裏		本数詞	助数詞		方位詞	2				
3	天心裏頗		天		心		裏		頗		助数詞		方位詞	副詞	1				
4	心裏頗不		心		裏		頗		不			方位詞	副詞	副詞	1				
5	裏頗不寧		裏		頗		不		寧		方位詞	副詞	副詞	單語分かれ	0				
6	頗不寧靜。		頗		不		寧		靜		副詞	副詞			2				
7	不寧靜。今		不		寧		靜		。	今		副詞			單語分かれ	0			
8	寧靜。今晚		寧		靜		。		今		晚					2			
9	靜。今晚在		靜		。		今		晚		在					0			
10	今晚在院		今		晚		在		院		院			介詞	單語分かれ	0			
11	晚在院子		晚		在		院		子		子		單語分かれ	介詞		0			
12	在院子裏		在		院		子		裏				介詞		方位詞	2			
13	院子裏坐		院		子		裏		坐						方位詞	2			
14	子裏坐着		子		裏		坐		着			單語分かれ	方位詞		助詞	0			
15	裏坐着乘		裏		坐		着		乘			方位詞		助詞	單語分かれ	0			
16	坐着乘涼，		坐		着		乘		涼		，			助詞		2			
17	着乘涼，忽		着		乘		涼		，		忽			助詞		單語分かれ	0		
18	乘涼，忽然		乘		涼		，		忽		然						2		
19	涼，忽然想		涼		，		忽		然		想			單語分かれ			0		
20	忽然想起		忽		然		想		起								2		
21	然想起日		然		想		起		日			單語分かれ				單語分かれ	0		
22	想起日日		想		起		日		日								2		
23	起日日走		起		日		日		走								2		
24	日日走過		日		日		走		過								2		
25	日走過的		日		走		過		的			單語分かれ				助詞	0		
26	走過的荷		走		過		的		荷						助詞	單語分かれ	0		
27	過的荷塘，		過		的		荷		塘		，			助詞			2		
28	的荷塘，在		的		荷		塘		，		在			助詞		介詞	1		
29	荷塘，在這		荷		塘		，		在		這				介詞	指示詞	1		
30	塘，在這滿		塘		，		在		這		滿		單語分かれ	介詞	指示詞	單語分かれ	0		
31	在這滿月		在		這		滿		月		月		介詞	指示詞			2		
32	這滿月的		這		滿		月		的				指示詞			助詞	2		
33	滿月的光		滿		月		的		光							助詞	2		
34	月的光裏，		月		的		光		裏		，	單語分かれ	助詞			方位詞	0		
35	的光裏，總		的		光		裏		，		總		助詞			方位詞	單語分かれ	0	
36	光裏，總該		光		裏		，		總		該			方位詞				2	
37	裏，總該另		裏		，		總		該		另			方位詞			副詞	1	
38	總該另有		總		該		另		有							副詞		2	
39	該另有一		該		另		有		一		一		單語分かれ	副詞		本数詞	0		
40	另有一番		另		有		一		番		樣		副詞			本数詞	助数詞	2	
41	有一番樣子		有		一		番		樣		子				本数詞	助数詞	單語分かれ	0	
42	一番樣子		一		番		樣		子				本数詞	助数詞				2	
43	番樣子吧。		番		樣		子		吧		。		助数詞				語氣詞	2	
44	樣子吧。月		樣		子		吧		。		月						語氣詞	單語分かれ	0
45	子吧。月亮		子		吧		。		月		亮		單語分かれ	語氣詞				0	
46	吧。月亮漸		吧		。		月		亮		漸		語氣詞				單語分かれ	0	
47	月亮漸漸		月		亮		漸		漸									2	
48	亮漸漸地		亮		漸		漸		地				單語分かれ				助詞	0	
49	漸漸地升		漸		漸		地		升							助詞		單語分かれ	0
50	漸地升高		漸		地		升		高				單語分かれ	助詞				0	